

【落葉】おちば

その昔、炉開きは十月(旧暦)、特に西日本では亥の日に行われることが多かったようです。初亥の日は武家、二の亥の日は町家といわれますが厳密ではなかったようです。当然、地域によっても違いがあったことでしょう。また、炉を開いたからといって風炉を夏まで使わなかったわけではありません。要するにおおらかだったのです。

今日の月単位での道具の区分があまりに厳密なのは「〇×教育」の成果といえましょう。落ちこぼれ茶人の私には厳密な規定は窮屈でなりません。

「開門多落葉」、炉開きによく掛かる一行ですね。「開」は炉開きを、「落葉」は冬の訪れを思わせます。紅葉は色を、落葉は落ちた状態を、枯葉は枯れた色や質感に重きを持つ言葉です。紅葉は秋の季語、落葉や枯葉は冬に属します。

落葉には「落葉衣」「落葉焚」「落葉時雨」「落葉搔き」「落葉籠」などの用例があります。「落葉衣」は木の間より漏れる月の光が着物に斑に照る様をいいます。落葉が散在する景色に見立てたのでしょうか。その他、落葉で作った仙人の衣服も、散る落ち葉が衣に掛かることも落葉衣といえます。

「落葉焚」といえば多くの人が「かきねの かきねの まがりかど たきびだ たきびだ おちばたき…♪」の歌を思い出すことでしょう。あの歌は『たき火』という題で巽 聖歌の作詞です。「あたらうか あたらうよ」という問答が何ともいいですね。私はこの歌を聴くと俵万智の、

・「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ  
という短歌がリンクしてきます。

炭を使わずに落葉や枯れ枝、薪で湯を沸かす野点をふすべ茶の湯といえます。「ふすべ」とは「ふすぶ」=煙を立てるの意味です。利休は松の枝に釜を吊り、松葉を搔き寄せてふすべ茶の湯をしたそうです。松風の音や煙の風情がすばらしく秀吉公も感心したと『南方録』や『閑夜茶話』は伝えています。

野点は天候、地形、水廻りなどに影響を受けやすい難しい席ですよ。設えも、野外ですので、何か客の目を引く求心的な物がないと視線が散って捉えどころのない席になりがちです。利休は野点の席で名物の尻膨茶入を使い、客の目を引きつけたという伝えがあります。

今日の野点傘の始まりと思われます北野大茶湯でのノ貫(へちかん)の朱塗の大傘も、人目を引くための工夫だったのでしょうか。

利休のふすべ茶の湯も、風情ある煙により客の視線を集め、野点の課題を克服する意図があったのではないのでしょうか。